

人間とラブラドル・レトリバー

木所 薫

私達、日本人は「ラブ」「ラブラドル」と聞くと、一般に盲導犬にする犬、作業する犬というイメージを抱きますが、動物文化の高いイギリスなど、諸外国の人々は、もっと大らかで、広い視野でこの犬を見ているようです。これは、文化の違いが大きく作用しているのでしょうか、日本にまだラブラドル・レトリバーの数が少ないせいでもあるようです。

この数年の間に、日本でもラブラドルの愛好者が急激に増えて来てはいる様ですが、何となく素敵な犬だなと感じてはいても、西洋とは対照的な宗教・生活形態を持つ日本人には、どのようにこの犬に接したらよいのか、どのように理解したらよいのかわからずに手をこまねている方も多い様です。

ラブラドル・レトリバーは、その名の通りラブラドル半島周辺の寒さの厳しい地方にその起原を持ち、寒い中で狩猟を手伝わせる中で、それをいかに力強く、また快活に行なわせるかという目的のもとに改良が加えられ、現在の様なラブラドル・レトリバーという一犬種が確立されたものだといわれています。私達のイメージでは日頃、狩猟という娯楽を連想し、狩猟犬は単に獲物を捕まえるための道具として方付けてしまいがちですが、ラブラドルの祖先達を飼い育てて来た狩猟民族である人々にとっては、猟は自分達の命を繋ぐ糧であり、それに携わる犬達は貴重であり、また孤独な原野における狩りの旅にあっては、心をなごませて下れる愛すべきパートナーであった事でしょう。

近世になってイギリスに渡ったラブラドル・レトリバーの祖先達から、長い年月を経て、物事に耐え、忠実に使命を全うする能力と、人間を疑うことなく愛する温和な性質をひきついで、現在のラブラドル・レトリバーは出来上がり、広く人々に受け入れられ愛されて来たようです。

ラブラドル・レトリバーの秘められた能力を発見したイギリス人達は、単に狩猟だけでなく、警察犬・盲導犬・警備犬などにも広く役立たせ、他の国々にも広めて行った様です。

最初にラブラドル・レトリバーが日本に上陸したのが何時かは知りませんが、この犬が世間一般に少しは知られる様になったのはごく最近のことだと思います。ですから、ラブラドル・レトリバーを飼った方々は、今まで出

合ったことのない、この犬の気質に戸惑うことが多いと思います。今まで私達が親しんできた洋犬のスピッツやシェパード、プードルやマルチーズ、ヨークシャテリアなどとは異なるし、日本犬の柴犬、秋田犬などとも全く違う。雑種の雰囲気でもない。洋犬と日本犬の気質を大ざっぱに言えば、全てがそうであるとは決して言えないのですが、洋犬は陽、日本犬は鋭利となるのではないのでしょうか。そして、ラブラドル・レトリバーは、その中でもトップクラスの陽なのです。

ラブラドル・レトリバーが、高度な能力を持った犬であることは、日本の数少ない、この犬に関するどの資料にもうたわれておりますが、私は時として、この犬の思いもよらぬ行動や、判断力に、はっと息をのむことがあります。最近では、徐々にこの犬の特徴が、一般にも知られて来つつある様ですが、少々誤った理解の仕方をしている方も少なくないので、これは、声を大にして言いたいことなのですが、ラブラドル・レトリバーが、どんなに秀でて高度な能力を持った犬であっても、それは人間の手で引き出し、伸ばしてやらなければ発揮されないのだと言うことです。そして、その能力が、どういう方向に向いているのかを見極めてやることも、人間の役目なのです。ですから、よく「ラブラドルは頭の良い利口な犬なのでしょう」と問われますが、ダイヤモンドの原石はいくら持っていたても、持っているだけでは決して美しいクリスタルカットの宝石にはならないということです。

ラブラドル・レトリバーの陽気な性質は、人間がこの犬の高い能力を引き出してやるのにとっても有効に働くはずです。最近、世の中がなにかとさついている風潮で、ただ高い能力ばかりを求めて、この犬を飼おうとする人が多いようですが、私は、何かができる能力よりも、むしろ、この犬が身につけている温和で素直な気質を重視して欲しいと思います。もちろんこの良い気質の総ても、ひとえに飼主のこの犬に対する接し方次第で左右されます。ラブラドル・レトリバーは、遠い昔から常に人間の片割れとして、家族同様に愛されて来ました。飼主の中にはややもすれば犬に対する愛情を誤って理解している人もいます。必要以上に美食をさせ、わがまま勝手に振る舞わせるのが愛情とは言えません。家族同様とはいえ、彼らは犬なのですから、人間とごっちゃにした扱いをすることは、犬にとっても有難迷惑なことも多いでしょう。広大な原野を思う存分駆け廻り、人間もまた大自然の中に溶け込んで、四六時中犬たちと行動を共に出来るような生活の中で生まれ育って来たラブラ

ドール・レトリバーのルーツを思うと、一日に一度か二度、短い時間だけ、定まったコースをアスファルトに爪を鳴らしながら、運動しなければならない、日本の都市で飼われる犬達の状況は、うらめしい様な気がします。現在の土地の高価な日本では、望む方が無理なのでしょうが、できればラブラドル・レトリバーは広々とした庭のある所で、伸び伸びと飼うのがふさわしい様です。狭く、くしく、日も当たらない様な所に繋ぎっぱなしで飼うのは論外です。残念ながら、私は諸条件から家の中で飼っていますが、家の中で飼うことによって生じる利点もまた少なくはありません。人間と一緒にいる時間が長いせいで、言葉を驚くほど理解しますし、主人の生活様式とパターンを常時観察していて、よくそれに同化します。なによりも愛する犬が、手を延ばせばいつでも傍にいて下れる安心感は、何ものにも替え難いものです。しかし、犬は本来大自然の中で生活していた動物ですから、家の中で飼う場合には諸々の点で気をつけてやらなければならない点を忘れてはなりません。日光浴の不足による抵抗力の減退、毛質の変化、ビタミン欠乏や、急激な暖冷房による温度変化から来る体調の不調、新鮮な空気の不足などです。精神的にも、犬としての本能をなるべく失わせない様にしてやるとが必要だと思います。ラブラドル・レトリバーの持っている頑健強固な風格を失わせたくはないものだと思います。ラブラドル・レトリバーを、番犬の用に充てるために飼うことも避けるべきでしょう。番犬が欲しいのでしたら、他に番犬としての能力に秀れた犬種がいます。ラブラドル・レトリバーは、人間と一緒に、ころげ廻って体と体で遊ぶのが、なによりも大好きなのです。ラブラドルとつき合うことも、ここに隠されていると思います。彼らに何か教えようとする時にも、彼らのこの性質を利用すると非常に楽だと思います。彼らが興味を示さないことを、無理やり教え込むことは大変困難です。ラブラドル・レトリバーは、叱って教えるより、ほめて教える方が特に有効な犬です。遊びの中でチャンスを捕えて、ほめて教えることが大切です。陽気な彼らは一度ほめられると、何度でもほめられたことをやって見せようとしします。彼らは主人の喜ぶ顔を見るのが大好きなのです。ですが、うれしくなるとそれを表現するのに限度を忘れてしまうのも、ラブラドル・レトリバーの気質の一つのような気がします。中型犬の部類には入っていますが、牡のラブラドルならばたいがい30kg以上はありますから、喜んでとびつかれれば、女性などはその体重と瞬発力に、倒されてしまうでしょう。犬と言うと、人間を噛んだり、どう猛さに手を

焼くといったイメージがありますが、ラブラドルに関しては、喜びをこらえさせるのに手を焼いている方が、むしろ多いのではないのでしょうか。

まだまだ書きたりない事も多いのですが、とにかくラブラドル・レトリバーは、思い切り愛してやれば、その分の愛が返って来る犬である事は間違いありません。
